
 紹 介

Klima, “Negation in English”

— 変形分析の一例 —

細 谷 雄 平

Edward S. Klima, “Negation in English” は最初 Symposium on Transformational Analysis, University of Pennsylvania, 1959 及び Symposium on Machine Translation, National Science Foundation, Washington, D. C., 1959 において連続講演せられ、現在 Fodor and Katz (eds.), *The Structure of Language: Readings in the Philosophy of Language*, 1964 に所収の Generative (文をつくり出す) or Transformational (変形) Grammar に属する論文である。

マサチューセツ工業大学 (MIT) の教授 Noam Chomsky (*Syntactic Structures*, 1957) に始まるこれらの名で呼ばれる文法は、言語を、表面構造ではなく、深部構造において、捉えようとする特色をもつ。the shooting of the hunters なる名詞句が He shoots the hunters なる基底形から (transformation を通じて) 来たか、The hunters shoot なる基底形から来たかを明確に表示しようとする。もっとも、従来の文法がこういうことを無視したとはいえない。of に主語的關係を示す場合、目的語的關係を示す場合などがあるということは、いかなる文法教科書も記載している。しかし言語構造の記述において、それを明確に表示すべきことを主張し、且つ、そのための表示体系をつくり出すことは、Chomsky を待って、はじめて、可能になったのである。彼は She made her father happy の happy が Her father was happy から来ていること、a beautiful flower という attribution が The flower is beautiful という predication から来ていること⁽¹⁾まで表示しようとする。

Chomsky は二つの大きな目標をもっているように見える。一つは通信工学への寄与、また一つは独自の言語哲学の展開である。今日ほど、言語が、哲学の中心課題になったことは、かつてない。記号論理学を発展せしめる Bertrand Russell らの論理実証主義者。

(1) 「しかも事実上、規定詞は退化した述語であって……」福本訳『パウロ言語史原理』§ 97。

これに対立して、日常言語の正しい使用法を説く Oxford の日常言語学派 (Ordinary Language Philosophy)。Chomsky はそのいずれにもくみしない。彼は de Saussure の *langue, parole* の区別を、*competence, performance* の区別で置き換え、彼の研究目標が *competence* の解明であることを明かにした後、人間の言語能力 (*competence*) は *langue* の如き単なる “a systematic inventory of items” で説明し得るものではないと⁽²⁾いう。彼は、むしろ、「言語は *Ergon* (もの) ではなく *Energeia* (はたらき) である」といった Wilhelm von Humboldt (1767-1835) の観念論言語哲学に帰ろうとするかのようなのである。彼が Generative Grammar という名称に執着するのはこのためであると思われる。一般的には transformational analysis を特色とする彼の文法は Transformational Grammar の名称で知られている。

Klima のこの論文は transformational analysis の見事な一例である。そしてまた英語の否定表現の研究であるから Otto Jespersen, *Negation in English and Other Languages*, 1917 につながるものであって、その点のみに絞って考えてみても極めて優れた成果をあげているものと評価してよいであろう。

I. Preverbal Particle Not

Klima は “negative” という概念の説明を避ける。文法的分析においては不必要だといっているのであるが、一つには、それがあまりにもむづかしい問題であるからであろう。

Jespersen は *succeed* と *fail* について *fail*=not *succeed* だとしても *succeed*=not *fail* でもあるのだから、これらの語は *happy, unhappy* の場合と違って、いずれを *negative* と決めることも出来ないと考えたが、Klima は

He cannot read the text, much less translate it.

という frame をもち出す。この構文は、ゼロを前提として、それ以下、すなわち、マイナスをほのめかし、「読めない、翻訳出来るはずがない」という意味を伝える。ところが *fail* はこの frame を通り、しかし *succeed* にはこの真似が出来ないことがわかる。

He failed to read the text, much less translate it.

してみると、*succeed* と *fail* のうち、*fail* の方が *negative* であるという常識的直観が、案外、正しくて、Jespersen の観察が浅薄であったといわなければならないのである。

(2) Noam Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, 1965, p. 4

negative とは、もっとも広い意味では、陰陽の陰であると我々東洋に生をうけたものは考える。しかし陰陽二気の何たるかを明かにすることは容易ではない。

The writers will	{	(a) not, never, barely, scarcely, rarely, seldom, hardly, little, (b) so, always, almost, usually, surely, sure, frequently, often, probably, fortunately, etc.	}	believe the boy (1)
------------------	---	---	---	---------------------

(a), (b) とともに一応 preverbal adverbs と呼ぶ。このうち not と so が特異なものであることが、次の frame によって明かになる。

The writers	{	never, scarcely, almost always, seldom, etc.	}	believed the boy.	(2)
The writers did	{	not so	}	believe the boy.	

この not を PvP *not* (preverbal particle *not*) と呼び neg の典型的な形とみる。(2) における PvP *not* の特異な behavior について説明を加える必要はない。しかし変形分析を理解し neg の本質を知るためには、そういう分りきったことを変形分析が如何に取扱うかを見るのが一番の早道だとも考えられるのである。

構造言語学者、特に Zellig S. Harris は言語形態の分析を極限にまでおし進めた⁽³⁾。What has he been doing there? の中に wh, -at, have, -s, he, be, -en, do, -ing, th, -ere という形態素をみる。-at だの -ere は wh, th のための犠牲であって、裁ちのこりの布地みたいなものだといえるかも知れない。Chomsky は構造言語学のこういう遺産をうけついで、これをスプリングボードとして飛躍した。A. A. Hill は John picked the book up の述部を picked...up と the book とに分析しようとしたが、picked...up と離れているものを一体化することは “does violence to the actual fact of the language” であると考え、これをためらった⁽⁴⁾。ところがこの態度とは正反対に Chomsky は変形分析の単位たる constituents (成分) を現実の concrete elements をさすものと考えない。

(3) Z. S. Harris, *Methods in Structural Linguistics*, 1951

(4) A. A. Hill, *Introduction to Linguistic Structures*, 1958, p. 289

“They are simply elements in a system of representation.” と彼は⁽⁵⁾いう。最終的な文そのものは現実のものであらねばならぬが、その文をつくり出す過程において考えられる要素は、現実にしぼりつけられたものでなく虚構的なものであってもよい。ただそれが “linguistically meaningful” な結果を導き出すものでなければならぬという条件がつくだけのことである。

We take, he takes, they took のそれぞれ take, takes, took を

take+Present \Rightarrow take

take+Present \Rightarrow takes

take+Past \Rightarrow took

と考える。 \Rightarrow は becomes by structural change と読む。Present は音声的に無形の場合と有形の場合があるので、次の如き expansion が可能である。

Present \longrightarrow $\left\{ \begin{array}{l} \emptyset \\ S \end{array} \right\}$

\longrightarrow は is expanded as (or, is expanded to) と読む。Present, Past をまとめると Tense になる。従って

Tense \longrightarrow $\left\{ \begin{array}{l} \text{Past} \\ \text{Present} \end{array} \right\}$

$\left\{ \right\}$ は二者択一を示す。

P(ast) P(articiple), Pr(esent) P(articiple) はそれぞれ過去分詞, 現在分詞の affixes 即ち -en など及び -ing をさす。

PP · write \Rightarrow write+PP \Rightarrow written

PrP · write \Rightarrow write+PrP \Rightarrow writing

と考える。・は followed by と読み、二成分間の切れ目。+ は incorporated by と読み、二成分が一体化されることを意味する。PP · write と成分構造を表示するのは現実の姿を逆に行っていることになるが、最後までこれを貫き通そうというのではない。最初こう考えておくことが便利なのである。また take+Past \Rightarrow took, write+PP \Rightarrow written などの transformation にあらわれる個別的な不規則性も syntax の段階では問題にならない。形態音韻論部門において処理されるのである。なお () は任意選択を意味し、ま

(5) Noam Chomsky, “A Transformational Approach to Syntax”, Fodor and Katz (eds.), op. cit., p. 216

たカッコ類の前後では・を省略する。

基本的な S(entence) の成分構造を次のように表示する。

$$S \longrightarrow \text{Nominal} \cdot \text{Predicate}^{(6)}$$

$$\text{Predicate} \longrightarrow \text{Aux} \cdot \text{MV}$$

$$\text{Aux} \longrightarrow \text{Tense (M)} (\text{have} \cdot \text{PP}) (\text{be} \cdot \text{PrP})$$

$$\text{MV} \longrightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Verb (Nominal)} \\ \text{be} \cdot \text{Predicative} \end{array} \right\}$$

Nominal は N(oun) P(hrase) といってもよい。この場合主語であるが, Chomsky はそれはわかりきっているので, 断る必要はないとい⁽⁷⁾う。M(ain) V(erb) は Verb のみの場合 (v. i.), Verb と目的語たる Nominal から成る場合 (v. t.), 及び be と Predicative (所謂補語) とから成る場合と, 三つの場合が考えられている。be は Verb とは別物として取扱われるが, 所謂動詞でないというわけではない。Aux(iliaries) は Tense; can, will など所謂 defective verbs と呼ばれる M(odals); 及び完了形助動詞, 進行形助動詞から成る。Tense 以外は任意選択である。They go においては, Aux は Tense たる ϕ のみ。go は MV である。

$$\text{Present} \cdot \text{go} \Rightarrow \text{go} + \text{Present} \Rightarrow \text{go} + \phi \Rightarrow \text{go}$$

と表示することが出来る。Aux のすべて成分がみたまされた場合の例は

$$\text{Tense} \cdot \text{M} \cdot \text{have} \cdot \text{PP} \cdot \text{be} \cdot \text{PrP}$$

$$\phi \cdot \text{will} \cdot \text{have} \cdot \text{be} + \text{PP} \cdot \text{-ing}$$

と考えることが出来る。MV が write a letter であるとすれば Aux · MV は

$$\text{will} + \phi \cdot \text{have} \cdot \text{be} + \text{-en} \cdot \text{write} + \text{-ing a letter}$$

のように考えられる。

結局 Predicate は

$$\text{Tense (M)} (\text{have} \cdot \text{PP}) (\text{be} \cdot \text{PrP}) \text{MV}$$

(6) 伝統文法の用語を用いて SV, SVC, SVO, SVOO を

$$\text{文} \longrightarrow \text{S} \cdot \text{V}$$

$$\text{V} \longrightarrow \left\{ \begin{array}{l} \text{Verb (O)} (\text{O}) \\ \text{be} \cdot \text{C} \end{array} \right\}$$

と書き表わしたのに等しい。大改良を加えたことになるのであるが, その一つは, 主語とは文の主語であり, 目的語とは述語の目的語であるということをも明かにしている点である。

(7) N. Chomsky, *Aspects of the Theory of Syntax*, p. 69

これに対して、不定詞句、分詞 (gerund) 句は

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{to} \\ \text{PrP} \end{array} \right\} (\text{have} \cdot \text{PP}) (\text{be} \cdot \text{PrP}) \text{MV}$$

と表示することが出来る。⁽⁸⁾ 受働態を考慮するならば、(be・PP) を MV の前に入ればよい。

PvP not 及び so は、この Aux の中に置かれる。この場合 Predicate を

$$\text{Tense} \left\{ \begin{array}{l} (\text{M}) (\text{have} \cdot \text{PP}) (\text{be} \cdot \text{PrP}) \\ \text{do} \end{array} \right\} \text{MV}$$

と考えることも可能である。この方式に従えば、do go, did go がつくり出されることになるが、それは do+go ⇒ go, did+go ⇒ went という transformational rules を設けることによって難なく解決することが出来る。しかし Chomsky も Klima もこの可能性はとらないで、Aux(MV) を次の四つの場合に区分するという一見繁雑とも見える途を選ぶ。

Aux(MV)	第一成分・第二成分	例 文
(a)	Tense · go	He goes.
(b)	Tense+M · go	He can go.
(c)	Tense+have · X	He has {gone. money.}
(d)	Tense+be · X	He is {running. honest.}

X は whatever may occur in this position を意味する。

こうしておいて、PvP not を第一成分の直後に置くことを規定する。すると

- (a) Tense · not · go
- (b) Tense+M · not · go
- (c) Tense+have · not · X
- (d) Tense+be · not · X

(8) かくの如く表示してみれば、不定詞句などが極めて clause に近い構造をもち得るものであることが判然とする。George. O. Curme は infinitive clause という用語を使った。Cf. Curme, *Syntax*, p. 457

次に Tense が動詞との接触を妨害せられ孤立している場合には do によってこれを support するという Do-support と呼ばれる変形規則を設ける。すると (a) は do+Tense・not・go となり、首尾よく does not go がつくり出されるのである。(b), (c), (d) は Tense が動詞と接触しているので Do-support をうけない。この場合 be も動詞である。しかも Aux の成分であってもよいし、MV の成分であってもよい。have も同様であるが、MV の成分としての have を (c) ではなく、(a) によって考えねばならぬ場合 (We do not have....) のあることを認めておかねばならない。

上記 Aux(MV) の四つの場合、疑問文における inversion, 強調肯定文の stress の説明のためにも必要である。疑問文においては、Aux (MV) の第一成分を、主語たる Nominal の前に出すことを規定すれば

(a) Tense・Nominal・go

となり Tense は Do-support を受ける資格を獲得する。emphatic affirmation においては、Emph なる成分を、Aux(MV) の第一成分の直後に置くことを規定する。

(a) Tense・Emph・MV

(b) Tense+M・Emph・MV

(c) Tense+have・Emph・X

(d) Tense+be・Emph・X

(a)において Tense は Do-support を受ける資格を獲得する。こうして do+Tense ⇒ does をつくり出しておいて、次に Emph は直前の成分に stress を与えて然る後に自らを delete することを規定する。かくして

(a) He *does* go.

(b) He *can* go.

(c) He *has* {gone.
money. }

(d) He *is* {running.
honest. }

が作り出される。Klima はこの Emph が so に似ていることを指摘する。

He *did* believe the boy.

He *did so* believe the boy.

なお、この動詞にかかる intensive so は、我々にとっては、比較的なじみがうすいので、

この指摘も大した関心事にはなり得ないが、OED の *so*, B. 15 を参照せられたい。

われわれは以上において

$$\text{Present} \longrightarrow \left. \begin{array}{c} \phi \\ S \\ \text{do} \\ \text{does} \end{array} \right\}$$

であるのを見て来た。Klima が PvP *not* の背後に想定する the mobile constituent *neg* と呼ばれるものも、これに似た *impish* な性質をもつ成分である。

II. Sentence Negation

(a) *Either-conjoining*:

$$\text{Publishers will } \left. \begin{array}{c} \text{usually}^{(9)} \\ \text{always} \end{array} \right\} \text{ reject suggestions, and writers will}$$

$$\left. \begin{array}{c} \text{not} \\ \text{never} \\ \text{hardly} \\ \text{scarcely} \\ \text{seldom} \\ \text{rarely} \end{array} \right\} \text{ accept them, } \textit{either}.$$

という frame によって、(1) に於ける (a) 群と (b) 群とを区別することが出来る。(a) 群を *negative preverbal adverbs* と呼ぶ。PvP *not* は I. で述べた特異性にもかかわらず、その一員である。

(b) *Negative appositive tags*:

$$\text{Writers will } \left. \begin{array}{c} \text{not} \\ \text{never} \\ \text{seldom} \\ \text{rarely} \end{array} \right\} \text{ accept suggestions, } \textit{not even reasonable ones}.$$

しかし

(9) 原文では此処にも *not* がは入っているが、誤植と判定して削除した。*The Structure of Language* は誤植の決して少ない書物である。

△ Writers will $\left\{ \begin{array}{l} \text{usually} \\ \text{always} \end{array} \right\}$ reject suggestions, *not even reasonable ones.*

は成立しない。

(c) Tag-questions without ⁽¹⁰⁾ *not*:

Writers will $\left\{ \begin{array}{l} \text{not} \\ \text{never} \\ \text{seldom} \\ \text{rarely} \end{array} \right\}$ accept suggestions, *will they?*

しかし

△ Writers will $\left\{ \begin{array}{l} \text{usually} \\ \text{always} \end{array} \right\}$ reject suggestions, *will they?*

は成立しない。

(d) *Neither*-tags:

これについては、厳格派と寛大派があって、厳格派の *idiolect* において、この *frame* を通るのは *PvP not* と *never* のみである。

Writers will $\left\{ \begin{array}{l} \text{not} \\ \text{never} \end{array} \right\}$ be accepting suggestions, and *neither will publishers.*

△ Writers will $\left\{ \begin{array}{l} \text{seldom} \\ \text{scarcely} \\ \text{little} \\ \text{hardly} \end{array} \right\}$ be accepting suggestions, and *neither will*

publishers.

後者の例文は成立しない。

すなわち *PvP not* と *never* は *strong sentence negation* をひきおこす *complete negatives*, 他の *negative preverbal adverbs* 即ち *scarcely*, *hardly*, *barely*, *rarely*, *seldom*, *little* は *weak sentence negation* をひきおこす *incomplete negatives* だと

(10) 次の場合のものを除外する。

(a) Stop that noise, *will you?*

(b) W. Stannard Allen, *Living English Structure*, p.167 で *Truculent question tags* と呼ばれているもの。特殊のイントネーションを持っているので区別することは容易である。

"I've broken a cup." "Oh, you have, *have you?*"

見るのである。incomplete negatives は “n” という neg の音声上の反映をもたないけれども、不完全ながら sentence negation の力をもっているので

neg + seldom ⇒ seldom

という neg-incorporation(但し neg の音声的反映は皆無)を考える。neg の音声上の形が φ である場合と考えればよいわけである。しかし neg を吸収する以前の seldom などというものの実在しないことは will + Present ⇒ will の場合 Present に incorporate される以前の will なるものが実在しないのと同様であって、いずれも “elements in a system of representation” であることに注意しなければならない。

要するに Klima によれば sentence negation の本体は neg であって、それは比較的純粋な形で PVP *not, never* に現われ、比較的純粋ならざる形で incomplete negatives に現われるというわけである。never については

neg + ever ⇒ never⁽¹¹⁾

と考え、かくの如き変形を neg-incorporation と呼ぶ。ever は indefinites の一つである。

wh, neg などは indefinites の起こり易い environment をつくり出すといわれる。かかるものがなければ indefinites は起こり得ないといっは、いい過ぎである。You can take any two stamps.⁽¹²⁾ またかかるものがある場合、不定でないところの数量詞 (Quantifiers) は起こり得ないというのも、いい過ぎである。Some of them don't believe the boy.⁽¹³⁾ しかし wh, neg などが indefinites の起こり易い環境をつくり出すということは

(11) この場合の neg-incorporation は optional であるし、また not ever と never とは必ずしも等意でない。次の場合第四例が成立しない。

Writers will never accept suggestions.

Writers won't ever accept suggestions.

Writers don't ever accept suggestions.

△Writers do never accept suggestions.

(12) この any が indefinites に属するかどうかについて論争があるようである。

(13) この some は、文法上の要求を越える意味上の要求から起こっているといわなければならない。やはりこの「意味上の要求」のために、次の III. 成分否定のところでの例文

She is too weak to have another child until after the operation.

に対し

He is too intelligent not to recognize her talent.

が起こる。neg を二つ考えなければならないので、やや複雑な説明を要する。

認めてよいであろう。

much, many, some, a, a single, one, all, every, everyoneなどを Quant(ifiers)と呼ぶ。すると

$$\text{Nominal} \rightarrow (\text{Quant}) \text{ Noun} \begin{cases} \text{Sg} \\ \text{Pl} \end{cases}$$

と、主語または目的語たる名詞句が、数量詞に修飾せられた単数または複数の名詞に expand される場合が考えられる。

ところで、一応 some に対する indefinite Quant は any であって

$$\text{Indef} + \text{some} \Rightarrow \text{any}$$

と考えられる。しかし

That house has a roof. That house doesn't have any roof.

He has insight. He doesn't have any insight.

He is smarter than she. She isn't any smarter than he.

などを見ると、any は some に対応するのみならず a, ϕ にも対応するといわねばならぬ。そこで

$$\text{Quant} \rightarrow \begin{cases} \text{Quant}_1 \\ \text{Quant}_2 \\ \text{Quant}_3 \end{cases}$$

$$\text{Quant}_3 \rightarrow \begin{cases} \text{some} \\ a \\ \phi \end{cases}$$

$$\text{Indef} + \text{Quant}_3 \Rightarrow \text{any}$$

と考える。こういう変形を Indef-incorporation という。

$$\text{Indef} + \text{sometime} \Rightarrow \text{ever}$$

$$\text{Indef} + \text{too} \Rightarrow \text{either}$$

wh, neg などはいくつかの Indef-incorporation を文中に一つのみならずひき起こすのである。

There wasn't *any* rain falling *anywhere* else.

次に sentence negation の例文をあげるが strong sentence negation をひき起こすものと、weak sentence negation をひき起こすものがある。preverbal adverb たる

little は後者に属したが Quant たる little, few は前者に属している。

Not much rain fell and neither did much snow. (3)

Not many smokers chew gum. (4)

Not much was given to anyone by anybody. (5)

△ Anybody gave *not much* to anyone. (6)

Nobody gave much to anyone. (7)

Most publishers won't accept suggestions, and *scarcely any* writers will accept them, either (8)

△ Anybody *scarcely* hits anyone. (9)

△ Anyone was hit by *scarcely anybody*. (10)

Nothing happened. (11)

△ *Not anything* happened. (12)

Little rain fell, and neither did much snow. (13)

Few writers accept suggestions, and neither do many publishers. (14)

No rain fell and neither did any snow. (15)

△ *No* rain fell and any snow didn't, either. (16)

No one has hit anybody. (17)

△ Anybody has been hit by *no one*. (18)

Nowhere has anybody been hit by anyone. (19)

He *never* rejects anything. (20)

Scarcely ever does anybody hit anyone. (21)

Even then the writers of *none* of the reports thought that any rain had fallen anywhere else. (22)

Not even then the writers of any of the reports thought that any rain had fallen anywhere else. (23)

Never before had they realized that any time had elapsed. (24)

Not a single writer thinks that any rain fell anywhere else. (25)

neg はイタリックスの部分に現われ、多くの場合 neg-incorporation を起こしている。no, never, nothing などにおいては neg-incorporation のみならず、音声上の fusion をもひき起こしているのである。

文否定の *neg* は自らの属する *clause* の中のみならず、その *clause* に属する従属 *clause* の中においても *Indef-incorporation* を *motivate* する。そうしておいて

(a) *Aux* の前に *indefinites* がある場合 *the first of the preverbal indefinites* を対象として *neg-incorporation* を起こす。

(b) *preverbal indefinites* がない場合 *Aux* の中に位置し *PvP not* となる。

(c) *preverbal indefinites* がなく *postverbal indefinites* のみがある場合、その一つを対象として *neg-incorporation* を起こすことがある。

以上のうち (a) は *obligatory* であり、その際 *neg* は *Aux* の第一成分を *attract* して *inversion* を *motivate* する。(c) は *optional* である。

なお *neg-incorporation* は *Indef-incorporation* と違って、自らの属する *clause* の外に出て従属 *clause* の中へ進出することはない。従って

He did not know that anything had happened. (26)

He knew that nothing had happened. (27)

において (26) たるべきものが (27) となることはない。(27) の場合 *neg* はもともと *that-clause* に属しているのである。後で触れるが、むしろこれと逆に *that-clause* に属するはずの *neg* が主節の方へ移されたと思われる場合即ち *negative absorption* と呼ばれる現象が見られる。

(3), (4), (5) において *not much*, *not many* は *little*, *few* と等意である。(4) は *Many smokers don't chew gum* と等意でない。但し *not much* の *incorporation* を保持するために (6) の如くすることは出来ない。(7) であらねばならぬ。従って、(7) は幾分 *ambiguous* であるかも知れないが、(5) と等意であり得ることは (3) によって明かである。Klima は

Indef+a lot ⇒ *much* *Indef+many* ⇒ *many*

と考える。*indefinite* でない *much* は考えていないようであるが、*much* (*very much* は別) は肯定文にほとんど現われないという観察にもとづくことかもしれない。(12) の場合 *not anything* に *incorporation* が起こるべきものとすれば、それは必ず音声上の *fusion* を伴い *nothing* とならなければならない。(22) は難解で (23) のように書き改めると、わかりよくなる。*neg* が主語の修飾句中の *indefinite* を対象に *neg-incorporation* を起こしているため、文否定でないような印象を与えるのであるが、「その報告を書いた人たちは、その時でさえ、ほかの何処でも、雨は降らなかったと思っていた」という意味。of any

は the first of the preverbal indefinites でないから ⑳ は幾分反則気味の文であるかも知れないが even then が極めて明瞭なる indefinite であるとも思えない点を考慮すべきであろう。㉑ は strong sentence negation の例文になり得る。

The writers of none of the reports thought so, and neither did
the publishers of any of the brochures.

なお neg が postverbal indefinites を対象として optional neg-incorporation を起こしている例として

He admired her *not at all*.

I will force you to marry *no one*. (㉒)

をあげることが出来る。㉒ は I will not force you to marry anyone と等価であり得る。

{ I won't force you to marry anyone }
{ I will force you to marry no one } and *neither will he*.

は成立する。しかし ㉒ は structurally ambiguous であって

I will force you not to marry anyone. (㉓)

と等価の場合もあり得る。㉓ の not は indefinites とは無関係で、この位置にあるのはそれが不定詞句に属する故である。

(neg) { to }
{ PrP } (have · PP) (be · PrP) MV

㉓ は文否定の例文にはならない。しかし

I will force you not to marry anyone, *not even the man you love*.

は成立する。文ではなく、not to marry anyone という不定詞句が negative appositive tags を許すのである。

△ I will force you not to marry anyone, and *neither will he*.

(14)
は成立しない。

neg のもつ移動性の証明として Klima は

(14) だからといって

△ I will force you not to marry anyone, and *so will he*.

が正しいとは考えない方がよいであろう。言語現象に symmetry を求め過ぎるのは馬鹿げている。

I will force you not to marry anyone, and *he will, too*.
ならば問題はない。

No one need go.

Not many writers can help thinking so.

の例をあげる。述部は *need not go, cannot help thinking* の形をとって現われるのが普通であるが、その *not* をささえるはずの *neg* は文頭の *no, not* の方へ移っているのである。

III. Constituent Negation

次にあげるものは *sentence negation* の例文でないことは明かであるが、"negative" と無縁であるともいえない。

He is *unable* to find any time for that. (30)

He *disliked* to do any more than necessary. (31)

They *doubt* that I need ever consider the problem. (32)

Not long ago it rained. (33)

Only then did any rain fall anywhere. (34)

I am *surprised* that he ever speaks to her. (35)

(a) *unable, dislike, useless* などを *words with negative affixes* と呼ぶ。これらの語を含む文が従属的な不定詞句など又は *that-clause* をもっている場合、それらの中で *Indef-incorporation* がひき起こされることがある。⁽¹⁵⁾

It is inconceivable that he could do *any* more.

He would be unwise to do *any* more.

It is unusual for *any* rain to fall in January.

これらの語もまた *neg* をもつといわねばならぬ。しかしそれは *the neg of constituent negation* と呼ばれるもので、*mobility* をもたず、*sentence negation* の原動力にはならない。

(b) ③の *doubt* 及び *forbid, too* などを *inherent negatives* と呼び *the neg of constituent negation* をもっていることを認める。

(15) 厳密にいえば、これらの語に対して *Comp(lements)* という関係に立つ *phrase, clause* 内においてのみ *Indef-incorporation* が起こるといわなければならない。変形分析の最も特徴的な作業たる *Comp* による変形代入については、本稿において、触れる余裕がなかった。

He forbids her to have another child for several years.

She is too weak to have another child until after the operaiton.

△ He allows her to have another child {for several years.
until after the operation. }

inherent negatives と words with negative affixes とは実質的には極めて類似している、どちらも Comp をもつ時その中で Indef-incorporation を motivate する。またいずれも PvP *not* などとともに次に述べる negative absorption に関係する。

They don't think that writers can help smiling at that.

It is {not likely } that he will get there until after the game.
{unlikely }

They doubt that I need mention this again.

これらの文において、もともと *neg* は *that*-clause に属しており、その故に *can help smiling, until after the game, need mention* などの句がひき起こされたと考えることが出来る。その *neg* が主節の方へ吸収されていると解し、この現象を *negative absorption* と呼ぶ。(26), (27) 参照。

(c) (33) の *not* は定義により PvP *not* ではない。

Not infrequently it rains very hard here.

この *not* が成分否定であって、文否定でないことは明白である。成分否定の場合 *inversion* は起こらない。

Not even two years ago could you enter without paying. (36)

Not even two years ago you could enter without paying. (37)

(36) は文否定であるから「2年前でさえ、無料入場は出来なかった」、(37) は成分否定であるから「ほんの二年足らず前には無料入場出来たのだ」の意味になるはずであるが、それは理論上の話であって、実際上の話としては Klima は “a clear case of ambiguity” だといっている。sentence negation における *inversion* はいわば *redundant features* に近いもので、あまり重責を負わすべき性質のものではないのであろう。

(d) (34) は the restrictive *only* なるものが、やはり Indef-incorporation, *inversion* をひき起こすことの例である。wh などともこういう力を持っているわけだし、この *only*

と neg との関係は今のところ明かでない。

- (e) I am *surprised* that he *ever* speaks to her.
 I am *sure* that he *sometimes* speaks to her.
 He was *ashamed* to take *any* more money.
 He was *glad* to take *some* more money.
 He was *stupid* to become *any* heavier.
 He was *smart* to become *somewhat* heavier.
 He was *reluctant* to see *any* more patients.
 He was *anxious* to see *some* more patients.
 He was *against* doing *anything* like that.
 He was *in favor* of doing *something* like that.

surprised, ashamed, stupid, reluctant, against は Comp の中で Indef-incorporation をひき起こす力をもっている。これらの語を Advers(atives) と呼ぶ。

words with negative affixes, inherent negatives, 及び Advers は近親関係をもつものと思われる。それらに属する語のうち一部は PvP *not, never* などとともに *much less* ⁽¹⁶⁾ 構文を成立せしめる。

I *doubt* that he can read the text, *much less* translate it.

I am { *afraid* } to talk about it, *much less* write about it.
 { *ashamed* }

He { *failed* } to read it correctly, *much less* translate it.
 { *refused* }

It is { *difficult* } to travel with him, *much less* room with him.
 { *hard* }

(16) ついでながら、これと異なる environment に現れる *much less* もある。

It's a joy (and sometimes a shock) to encounter a teen-ager who can speak courteously and intelligently to an adult he knows, *much less* a stranger. (Ann Landers)

IV. Conclusion

The writers doubt the boy. (38)

The writers don't believe the boy. (39)

なる二文を比較すると(38)は、これを否定して *They don't doubt the boy* なる否定文をつくり出すことが出来るし、また *Either-conjoining* 以下の frames にもつまずくので、(38)と(39)とはその外部事情を全く異にしていることがわかる。しかしながら、この二文のみをとり出せば、両者が等意であるということは否定出来ない。ところが Klime は *doubt* に吸収されている *neg* は *doubt* とともにあるが、PvP *not* の場合 *neg* の位置は文頭であることを主張する。これは変形分析の用語では、文否定の *neg* は S の *expansion* においてあらわれ

S → (neg) Nominal · Predicate

doubt に吸収されている成分否定の *neg* は Predicate の *expansion* においてあらわれる

Predicate → (neg) Aux · MV

ということを主張することになる。ところが、これに対して、事実問題として(39)のPvP *not* も Predicate と共にあるではないかという反問が予想せられる。たしかに反問の通りであるが、しかしもしこの場合 *preverbal indefinites* があるとすれば *neg* は直ちにそちらの方へ移らねばならぬのだという内部事情を(39)は抱えているのである。いいかえると、(38)と(39)とは一応似ているかも知れないが、(39)は

None of them believe	}	the boy.
Never do they believe		
At no time do they believe		

と多様に変化し得るものの一つのあらわれに過ぎないのであって、いわば、門閥的背景のようなものに囲まれているといい得るかも知れない。

Klima は *neg* の文頭の位置は次の場合の説明に便利だという。

The old man wanted to remain, but not young people.

Mary supports John, not John, Mary.

If Mary is permitted to leave, why not John?

これらの場合において *neg* を attract すべき Aux が suppress されているので、Pv

not が *neg* 本来の位置をとっているのだと説明する。

Mary can come in but not anyone else.

は(12)にかかわらず成立する。Aux が suppress されてない場合は、

Mary can come in but nobody else can.

であらねばならぬ。

Not John but Mary supports the family, doesn't she?

も not John の次に Aux が suppress されていると考えればよい。文の主語は Mary のみのはずであるから。

なお

Not that I hate him.

などに同様の説明を与えることも案外差つかえないのではないかと私には思える。